

蟻高
120周年

母校と同窓会のあゆみ

大正デモクラシーの女性像と
松本高等女学校

土屋文明校長を中心として

大正11年
1922年

- 土屋文明が第3代校長として着任
33歳の若く進歩的な校長を教員生徒は信頼し
学校は明るく積極的な形へと変化していった

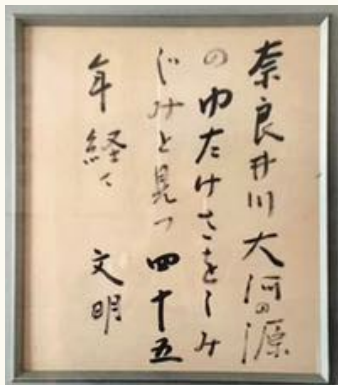
その頃

1923年 関東大震災

土屋文明校長の教育観

旧来的な女性のたしなみを重視した教育方針に対し、学問に力を入れ教科の学習により“女性が男性と同列に認められること”を目指した。「裁縫、お琴、お茶、お花等は卒業後にできる!」とし、裁縫にまわされていた数学の時間を規定通りにし、補習科での茶の湯、生け花を時間外の自由選択にするなど、新時代にふさわしい女性の知的教養をめざした。その姿勢は、旧来のやり方を支持する一部職員や保護者、松本の有力者、新聞など地域社会の反発もうけた。わずか2年で木曾中学校長への転出辞令が出たが、拒否して帰京。

(蟻高70年史、100年史に詳細あり)



昭和42年3月6日には蟻ヶ崎高校にて「松本と私」と題し講演。その際の、直筆の色紙が現在校長室に飾られています。

“奈良井川 大河の源のゆたけさを
しめみと見つ 四十五年経て 文明”



土屋文明(1890~1990)

群馬県生まれ 「アララギ派」歌人
国文学者として「万葉集」の研究に
大きな業績を残した
日本芸術院会員 宮中歌会選者
文化勲章受賞

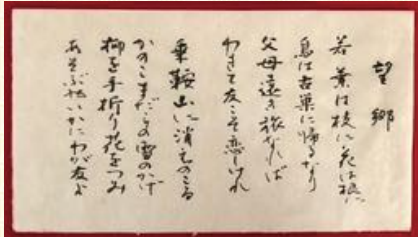
明治・大正期の個性あふれる先生

太田水穂 (1876~1955)

塩尻市生まれ 歌人 芸術院会員
明治 36 年から明治 41 年まで松本高女で倫理・国語の教師。短歌、俳句、作文、悔やみ文まで、型にはまらない自由自在で楽しい授業であった。教員生活のあと上京し歌誌「潮音」を創刊。芭蕉研究に力をそそぐ。窪田空穂、島木赤彦らと親交があった。



塩尻短歌館 提供



昭和21年5月31日に松本高女で講演をし、即興歌「望郷」を作りました



書斎の唐沢先生
校友誌「謝恩記念号」より

唐沢貞次郎

明治 42 年から大正 11 年まで 13 年間第 2 代校長として創立後の礎を築いた。時勢に応じた家庭婦人の養成を主眼とし、音楽室・裁縫室など各種施設を増築、災害による校舎の損傷の大修繕に奔走した。退職時には「謝恩記念号」の校友誌が出されるほど慕われた。